

クラス		受験番号	
出席番号		氏 名	

二〇一二年 度

## 第二回 全統高2 模試問題

# 国語

二〇一二年八月実施

(八〇分)

試験開始の合図があるまで、この「問題」冊子を開かず、左記の注意事項をよく読むこと。

### 注 意 事 項

- 一、この「問題」冊子は23ページである。
- 二、解答用紙は別冊子になっている。(「受験届・解答用紙」冊子表紙の注意事項を熟読すること。)
- 三、本冊子に脱落や印刷不鮮明の箇所及び解答用紙の汚れ等があれば試験監督者に申し出ること。
- 四、試験開始の合図で「受験届・解答用紙」冊子の該当する解答用紙を切り離し、所定欄に **氏名** (漢字及びフリガナ)、 **在学高校名**、 **クラス名**、 **出席番号**、 **受験番号** (受験票発行の場合のみ) を明確に記入すること。
- 五、指定の解答欄外へは記入しないこと。採点されない場合があります。
- 六、試験終了の合図で右記四、の  の箇所を再度確認すること。
- 七、答案は試験監督者の指示に従って提出すること。

□ 次の文章を読んで、後の問に答えよ。(配点 六十点)

『<sup>(注1)</sup>ロビンソン・クルーソー』の主人公の行動原理は、<sup>a</sup>フカカイである。クルーソーの行動には A はあっても根拠はないように見える。なぜ彼は旅を続けたのか。そしてなぜ行き着く先が無人島だったのか。

クルーソーが無人島に漂着するまでの話を読み直しても、彼の行動原理は不明である。しかし、<sup>1</sup>無人島の物語として知られる本書が、実はその無人島にたどり着く前の話にかなりのページを割<sup>き</sup>いていることの意義は、ここを読み返すうちに明らかになるだろう。まず、クルーソーは貿易商人として異国の民を<sup>だま</sup>騙し、不当に高い利益を手にしていたことが記されている。彼はいわゆる<sup>(注2)</sup>三角貿易に<sup>b</sup>ジュウジしているので、間接的にアフリカから新大陸への奴隷貿易に協力している。と思えば海賊に襲われ、彼自身が奴隷になる。また、その奴隷状態から抜け出す際、一緒に逃げた仲間のジューリー少年を、ポルトガル人船長にあつさり売り払う。その後ブラジルで農場経営をはじめたクルーソーは、これまたあつさりとポルトガルに国籍を移す。そして黒人奴隷を密輸する船に乗りこんだ結果、やつと彼は無人島にたどり着いている。

ここから判<sup>わか</sup>るのは、クルーソーが文字どおり世界の市民であり、彼の視野は特定の地域や民族に制限されていなかったことだ。そしてもう一つ、彼の生きる世界では、物の価値がまったく安定していないことも<sup>c</sup>シテキしておきたい。ヨーロッパではガラクタ同然のもので莫大な利益をあげているだけでなく、人間さえも奴隷という商品に<sup>おとし</sup>貶められ、しかも奴隷を扱っていた者が一瞬で奴隷になってしまう。すべては状況に応じて金額という数に B され、物の本質は消滅している。こんな法も情けもない状態、それが十七世紀後半から十八世紀前半の世界の特徴であり、そこをいかに生き延びることができるかを問い続けたのが『ロビンソン・クルーソー』という作品である。つまり『ロビンソン・クルーソー』に出てくる「無人島」は決して特殊な空間

ではなく、むしろ常識が通用しない当時の世界を象徴する場所だといえる。だからこそ、この島は人のいない寂しい土地として描かれるだけでなく、いわゆる「食人種」の危険にさらされた地域としても表現されているのだ。

よって、クルーソーが「食人種」をこれほど恐れているのは、単に文明が野蛮を恐れているからではない。むしろこれは当時

の文明が抱えた問題を、心理的に反映したものだ。要するに、自分が「肉」に還元されること、つまり世界における暴力的な交換関係のなかで、商売を司る側から商品の側に落ちてしまうことへの潜在的な恐れが、自分を肉として食べる人種への恐怖と結びついているのだ。クルーソーが無人島に来る過程を描くことで、まずデフォーはこの世界の実情を読者に伝え、その延長で無人島における冒険が導入されることにより、本書はリアルでありながら象徴的でもあるサバイバルの記録として成立している。

デフォーがこのような作品を書いたのは、まさに交易によって世界が強引に結び付けられ、植民地と帝国主義の問題に人類が直面するようになったからだろう。一般に『ロビンソン・クルーソー』を大きなきっかけとして近代リアリズムが発展したといわれているが、少なくとも近代文学でリアリズムが重視されたわけは、『ロビンソン・クルーソー』を通して理解できるだろう。

『ロビンソン・クルーソー』に代表される近代小説の面白さは、物語や構成の美によるものではない。また、近代小説は必ずしも特定の共同体の分かち合う想像力を強化するわけではない。むしろそれは、共同体に属する人間の想像の外の世界、というより現代世界における人間の隠された本質を安全に顕在化させることで、束の間であれわたしたちを共同体の外に連れ出してくれる、神なき時代の C ともいえる存在だ。小説はこの世界を再現するのではなく、この世界を日常よりリアルに体験させるものであり、別世界を構成するのではなく、この世界とこのわたしの関わり方を再考させ、変容させるものだ。

しばしば、グローバル化とともに近代小説の役割が終わりつつあると言われている。しかし少なくとも『ロビンソン・クルーソー』は、グローバル化の進む現代においてこそ注目されるべき作品である。読む手段こそ、紙の本から電子バイタイに移行していくかもしれないけれど、このような作品が流通し続ける意味は、間違いなく存在する。それを証拠に、現在人気のある文学作品もまた、平凡な「この現実」の裏にある、常識を超えた、しばしば残酷な現実をあばきだそうとしている。この傾向は、村上春樹にも、『涼宮ハルヒ』シリーズのようなライトノベルにも、『ひぐらしのなく頃に』と『うみねこのなく頃に』のようなノベルゲームに至るまで、ジャンルを超えて共通している。『1Q84』のもう一つの世界も、『涼宮ハルヒ』シリーズの閉鎖空間も、『うみねこ』の六軒島も、すべてははじめに通常の現実からの通路が描かれていることに注意しよう。ここにはちょうど、

『ロビンソン・クルーソー』が無人島での生活からはじめていないのとおなじ

D

が働いている。「この世界」と海や陸で

続いているながら、常識の通じない異空間。そこでは「正解」がどこにあるか判らないし、選んだ答えが本当に正しかったのかも確かめようがない。そんな世界で、個人がどのように自分としての解を見つけ、生き延びるのか、これが価値観の混乱したグローバル時代の文学が取り組んでいる問題であり、ほとんどおなじ問題に、十八世紀の作家たち、特にダニエル・デフォーも直面していたのだ。

クルーソーの無根拠な自己肯定と本書のあばく世界の実像は、いまますます生々しい。この事実が伝えてくれるのは、わたしたちが各々の無人島とソウグウするのをやめないかぎり、本書のような文学作品が価値を失いはしないということだ。文学のない世界、それはすべての人間が固定した価値観に安住する世界である。そこは親や年長者の言いつけを守るような子供しかいない、冷めきった世界だろう。しかしわたしの周りの子供たちを見るかぎり、そんな世界はしばらくやって来そうにない。幸いなことに。

(武田将明の文章による)

(注) 1 『ロビンソン・クルーソー』……イギリスの小説家ダニエル・デフォー(一六六〇頃～一七三一)の作品。一七一九年刊行。

2 三角貿易……ここでは、十七・十八世紀にヨーロッパ・アフリカ・北アメリカの三地域間で行われた貿易のことを指す。イギリスの

植民地支配と結びつき、「奴隷貿易」とも言われた。

3 帝国主義……軍事上・経済上、他国または後進の民族を征服して大国家を建設しようとする思想や政策。

4 グローバル化……政治・経済・文化などが国境を越えて地球規模で拡大すること。

問一 傍線部a～eのカタカナを漢字に直せ。

問二 空欄 A

く D

を補うのに最も適当な語句を、次のア～キからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。ただし、同じものを二度以上用いてはならない。

ア 憧憬

イ 秘密

ウ 衝動

エ 動機

オ 還元

カ 趨勢すうせい

キ 啓示

問三 傍線部1「無人島の物語として知られる本書が、実はその無人島にたどり着く前の話にかなりのページを割いていることの意義」とあるが、筆者によればこの「意義」とはどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 交易によって世界が結びつけられ、帝国主義と植民地支配の問題が生じた当時の世界において、経済だけが事物の価値を計る唯一の尺度だったことを強調し、主人公の一見分裂した行動にも経済的合理性は存在していたことを示している。

イ 特定の地域や民族に制限されていない世界市民としての主人公が、世界を股またにかけて活躍する場面を活写することで、それとの対照性によって、無人島という狭小な領域に閉じこめられることになる主人公の不安をきわだたせている。

ウ 商品経済の浸透によって既存の常識が通用しなくなった当時の世界を、自分の才覚で渡っていく主人公の姿をリアルに描くことで、無人島に漂着しても困難な状況を克服して生き延びていく主人公の前向きな性格を読者に伝えている。

エ 西洋中心の価値観が絶対的なものではなくなり、西洋文明に対する信頼が揺らぎ危機感が高まりつつある当時の世界を背景に、無人島での生存を脅かす「食人種」という虚構を導入することで、作品全体を世界の象徴として差し出している。

オ 植民地支配の動きが広がりつつあった当時の世界が、特定の規範や倫理を共有しない無法地帯であり、人間をも含めた一切の事物が不断の価値変動にさらされていることを示すことで、その世界の象徴たる無人島での冒険に現実感を付与している。

問四 傍線部2「世界における暴力的な交換関係のなかで、商売を司る側から商品の側に落ちてしまう」とあるが、これと同じ内容を具体的に述べている一文を本文中から抜き出し、その最初の五字（句読点等を含む）を記せ。

問五 傍線部3「しばしば、グローバル化とともに近代小説の役割が終わりつつあると言われている」とあるが、「近代小説」が読まなくなると、どのような事態が生じると筆者は考えているか。その説明として不適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 自分の所属する共同体の考え方に、成員の誰もが唯々いだくだくと従うようになる。
- イ 日常生活の奥底に潜む人間の不気味な本質について、誰も考えなくなる。
- ウ 常識を疑わず、その背後に隠れる現実を想像する力が社会全体から失われる。
- エ 表面的には変化しているように見えても、根本的には保守的な社会が生まれる。
- オ 個人的な領域に閉じこもり、協調性が欠如した人間が増えるようになる。

問六 傍線部4「本書のような文学作品が価値を失いはしない」とあるが、筆者は「本書のような文学作品」の「価値」をどのような点に見出しているのか。百字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

問七 本文の内容に合致するものを、次のア～カの中から二つ選び、記号で答えよ。

ア 『ロビンソン・クルーソー』は、無人島へたどり着くまでの物語こそが最も重要であり、その部分を精読しなければならない。

イ ロビンソン・クルーソーの冒険は、個人的な体験を描いたものでありながら、当時の世界の様相を色濃く反映した性格を持っている。

ウ ロビンソン・クルーソーが漂着した無人島は、当時の世界のありようから隔絶した土地として造形されている。

エ 「食人種」への恐れは、野蛮に対する文明の蔑視だけではなく、自己のありようが覆されることへの不安が投影されたものである。

オ 現代の文学作品においては、グローバル化する現実自体を否定し、新たな世界を切り開こうとする主人公が数多く登場する。

カ 現代の子供たちは、固有の価値や本質を保持している異世界に対して、大人よりも興味を抱きがちである。



〔二〕 次の文章は、色川武大いろかわたけひろの小説「門の前の青春」の一節である。これを読んで、後の問に答えよ。（配点 五十点）

大滝幹良君は、私にとって最初の文学的友人であった。教室に居る間はさほどの交際をしていなかったが、三年のとき勤労働（注1）員で工場にかりだされ、その頃から急に親しくなった。

工場での持ち場が二人ともボイラーだったせいもある。ボイラーは他の部署とちがって一時間交代の労働のため、釜の上で暖をとりながら自由時間がすごせる。

たしか、その釜の上で彼から、ゴリ（注2）キイのフォマ・ゴルディエフの話をきいたのが、私が文学というものに積極的な関心を持つきっかけになったのだと思う。村一番の力持ち、木こりのフォマが山中で大岩と格闘するが、その結果、人力ではかなわなものの存在を知り挫折感（よそもの）と他者意識を芽生えさせる――。

私は非常に奥手で、というより野の子で、小説類にはごく浅い関心しか抱いていなかった。幼い頃から私は学業に親しまなかったため正規のものを受け入れる訓練ができていない。そのかわり、洗練される前の生なまのもの、雑多なものの中から核心をとりだす術すべは同じ年頃の者と比較してはるかに心得ている。なにしろ十歳前後の頃から雑踏の中で埃ほこりを浴びてそれ一本で生きてきたのである。

「お前みたいに本も読まない、勉強もしない、働かない、意志の制御もしようとしない駄目な奴と話していて、退屈しないというのはどういうわけかな」

と大滝がいった。

「俺は自然児なんだ。自分のやることは全部肯定していく。やらないことは必要がないとみなす。俺の身体が水先案内をするよ。何故って自然という奴はすべてのものを含んでいるからな。俺の要点は自然児以外のものになろうという気をおこさないことだ」

「それはちがう。誰でも壁というものがあって、その壁に規制されて生きている。お前には自分のその壁が見えないだけだ」



「壁も自然の一部なんだ、俺にとつてはな。その証拠に俺は自然という奴が好きじゃない」

「お前の判断でこのさき生き続けられるものか。お前はきつと判断をあやまるよ。賭<sup>か</sup>けてもいい」

<sup>1</sup> その会話のあとに、フォマ・ゴルディエフが出てきたのだと思う。

大滝はその時分に十九世紀までの小説をかなりたくさん読んで居、それらの作品を解説してくれた。おそらく多少舌たらずな説明だったと思う。私は自分で自己流に受けとつて勝手な評価をくだしていた。爾<sup>じらい</sup>来<sup>らい</sup>今日<sup>けふ</sup>まで、私はいくつかの例外をのぞいて本というものを読もうとしない。ずっと後年になって旧約聖書を読み、人智の恐ろしさを知るまで、彼とのそのときの賭けに負けたとは思っていなかった。

その頃、大滝の父親が急死して、彼の身心に不安定なものをかなり与えたと思う。

私が彼の中の正規な知識（乃至<sup>ないし</sup>は知恵）に興味を持つと同じくらい、むしろそれ以上に彼も、私の中の野卑なものに近づいてきたようである。多分、正規な知識では応用問題が処<sup>は</sup>しくかったのであろう。

私はメ<sup>注3</sup>フェイストフェレスのように、彼を連れて工場を抜けだし、私がくわしく知っている巷<sup>a</sup>の雑多な世界を引き廻した。彼はじめてみる踊り子に感嘆し、セリフもろくすつば覚えな<sup>い</sup>ドタバタ役者の芸を愛しはじめた。それらは私と同じく“生理”を軸に日をすごす下層庶民の生きざまの反映だったと思う。

「俺は、いろんなことが、どうでもよくなつたよ」

「それはよかったな。楽になつたろう」

大滝は複雑な表情になった。

「お前はしかし、将来ということを考えないか」

「それが俺の将来なんだ」

「そうだとしたら、うらやましいな」

一方、私たちは二人の小遣いを合わせて謄<sup>とうしや</sup>写版の機械を買いこみ、ガリ版雑誌の作製に熱中した。その件については他に記し

たものがあるので多くは触れないが、要約していえば（もちろん十四、五歳の少年が作るレベルでいつて）文学・生活・生理、この三つのものが雑多に入り混じった、いかにも私たちがらしい雑誌だった。大滝が「意味」から「存在」に關心を示したように、私も「存在」だけの不安を「意味」でおきなおうとしていた。私<sup>2</sup>たちは等しくはなかったが、結果的に一心同体といつてもいいほど接近しあっていた。

その雑誌が工場に配属されていた軍人の眼に触れて、非国民として処断され、私は無期停学、大滝はそこまではいかないがやはり似たような罪を受けた筈<sup>はず</sup>である。教室時代、彼はおとなしい生徒であり、教師の眼には非行生徒（というより学業放棄者）の私が実質的な首謀者に見えたのは当然であろう。

私たちは空襲が烈<sup>はげ</sup>しくなった頃、謹慎者という身分で不安定な日を送っていたが、彼は存外にへこたれてないようだった。

お互いに生家にも居づらいので、毎日、上野公園の茶店でおちあつて、当時の唯一の外での喰い物であるところてんをすすつた。透明に近い色のB29が上空を飛んでいる。

ふふふ、と大滝が笑った。

「頭の上にも、ところてんみたいなのが居やがらア」

私の接近で、彼が背負いこんだ一番大きなものは、「笑う」ということではなかったか。「笑う」ことでバランスをとろうとする。それは戦争の最中に微妙な年齢を迎え、さらに父親を失い、すべてに不安定だった彼にとつてきわめて魅力的な対処策だったろうが、そのかわりどんなことがあつても「笑い続け」なければならぬ。そういう麻薬のようなものだったと思う。

やはり上野公園の裏手ですぐそばに、不意に爆弾がおちたことがある。私を含めて附近の者は崖<sup>がけ</sup>下の線路に飛びおりて逃げたが、彼だけは走らず、私を烈<sup>はげ</sup>しく叱咤した。

「おい、馬鹿な真似をするなよ」

突飛ないいかただが、それは必死の声音<sup>こゑ</sup>だったと想像される。彼はゲート<sup>(注4)</sup>トルも巻かず、高下駄<sup>たかげた</sup>をはいて居たが、それらはすべて、戦争や個人的状況及び彼自身を笑い続けようという努力の一環にちがいはなかった。一瞬でもその姿勢を崩せない必死さが、

即ち彼の苦しきで、吸血鬼に噛<sup>か</sup>まれて吸血鬼的になった者が、ついに純粹の吸血鬼にはなりえないようなものである。

下町大空襲の夜は、二人そろって浅草を徘徊<sup>はいかい</sup>していて、死人の山の中を逃げ惑<sup>こ</sup>い、九死<sup>x</sup>に一生を得たが、火に囲まれた中で、「おい、お前が火をつけたような顔をしているぞ」

と彼にいわれた。それが彼の必死の冗談であった。

戦争が終る半年前、昭和二十年の三月に、級友は卒業期を迎え、上級学校に進学している。大滝は許されて復学し、早稲田大学の露文科に進んだ。私は無期停学（退学とちがって転校できない）のままだった。教師は私が吸血鬼であると見破<sup>く</sup>っていたらしい。

戦争末期はお互いに会う余裕もなく、安否さえ知れなかった。

八月に思いがけなく戦争が終って、まもなく、私の家の小さな門の戸をきしませて、大滝がトコトコと入って来たのを見たときの蘇生した思いを忘れることはできない。私は部屋の窓からそれを見て玄關に飛びだした。

学生服は着ていたが、無期停学のままの中学生である私に配慮したのだろう、大学の帽子はポケットに突込んでいた。

彼は唇を上げて笑い、すぐに引返して門の外に出た。私たちはその日ずっと、門の前の防火用水に腰をおろして話をした。

大滝家では息子がグレたのは私に誘惑されたことになっていて、私の名は禁<sup>d</sup>忌<sup>い</sup>になっている。私の親もとの方では逆に大滝が誘惑したことになるように、そう察<sup>さ</sup>して、彼は私の家に一度もあがりこもうとしなかった。

しかし毎日来た。私の家は早稲田のそばだったせいもあり、学校へ寄った帰りかもしれないが、その気配はうすかったように思う。

その頃、中学からの通知で無期停学は白紙に戻っていたが、私は二度と学校に顔を出そうとしなかった。そのかわり、かつぎ屋<sup>y</sup>や叩き売りや炭屋の小僧や、さまざまなことをやった。私の親は退役軍人で恩給停止になっており、大滝の家に負けず劣らず逼迫<sup>ひつぱく</sup>していたからである。しかし家のためというよりは、私自身の気ままな意志であり、まもなく博打<sup>ばくち</sup>に溺<sup>おぼ</sup>れこんだ。

そのおかげでいつも小遣錢に不自由しなかった。私は大滝を連れて戦争中と同じように遊び廻ろうとしたけれど、彼は頑強に

従おうとしなかった。

「俺は、ここでぼんやりしてるのが一番いいんだ」と彼はいった。

私の家の隣に大きな門の家があり、その門前の石畳が幼い子たちの遊び場になっていた。私たちは幼児を追ひ払って、その敷石の上にあぐらをかいて、とりとめのないおしゃべりをして日をすごした。彼は寒さにも暑さにも、空腹にも無為にも、よく耐えたようである。一度だけ、私の、自分の将来に関してあまりの無関心さに、呆れたようにそのことを口にした。

私の返事を待たず、他の話題にすぐ転じた。その話題になると、彼が自分の将来を笑いのめせないことにすぐ話がつながってくるからであつたらう。

彼は私よりずっと小心であつた。そのうえ家庭の逼迫が想像以上にきびかつたと思う。自宅に戻ると、自分の夢に見た将来（どんなものか具体的には知らないが）との断絶をひしひし感じたであろう。彼はすべてを笑いのめすことができず、しかし一度、笑うことを身につけてしまったために、水が低きに流れるごとく、外に出ると私に会う必要が生じたのであろう。

ある日、私が家の中へ入って飯を喰って、門前に戻ってくると、しゃがみこんでノートに字を書きつけていた。

「小説だよ——」と彼はいった。

そういえば、かつて私たちは小説めいたものを自分たちのガリ版誌にのせていたのである。私は恰好の遊びをみつけたつもりで、中絶していたガリ版誌の復活を提案した。

二、三度、小冊子を出したと思う。私が自分の生涯に根ざした小説を、彼は、意味にも存在にも徹しきれぬ不安をテーマにしていた。内容もそうだが彼の文章の慄え<sup>ふる</sup>までが手にとるようにわかる。その才能を世間がどう評価するかしらぬが、すくなくとも私は彼の愛読者であつた。

大学を（多分卒業したのだらうと思う）終えて、彼は北海道釧路<sup>くしろ</sup>の高校教師として就職したとき、大学へ入ったときと同じように、私には一言も口外せず、不意に東京を去っていった。おそらく、そのことを笑いのめすことができなかつたからであらう。

(注) 1 勤労働員……第二次大戦末期、労働力不足を補うために、中等学校以上の生徒が、軍需産業や食糧生産に動員されたこと。

2 ゴーリキイ……ロシアの小説家・劇作家(一八六八―一九三六)。

3 メフィストフェレス……ゲーテの小説「ファウスト」に登場する悪魔。ファウストを誘惑し、魂を売る約束をさせてその召使となり、その冒険を助ける。

4 ゲートル……軍服などとともに用いられ、ズボンの裾を押さえて、足首から膝まで覆うもの。

問一 傍線部 a～d の漢字の読みをひらがなで記せ。

問二 傍線部 x・y の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の A～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

x 九死に一生を得た

- |   |                  |
|---|------------------|
| A | 何とか生き延びようと努力した   |
| I | かけがえのない命が救われた    |
| U | 何度も死ぬような目にあつた    |
| E | 危ないところだからうじて助かつた |
| O | 生まれ変わったような思いをした  |

y 逼迫していた

- |   |                 |
|---|-----------------|
| A | 家庭のなかが荒れ果てていた   |
| I | 行き詰って余裕がなくなっていた |
| U | いろいろなことに手を出していた |
| E | 出口のない袋小路に入っていた  |
| O | 状況を打開しようともがいていた |

問三 傍線部1「その会話のあとに、フォマ・ゴルディエフが出てきたのだと思う」とあるが、どうして「大滝」は「フォマ・ゴルディエフ」の話を持ち出したと考えられるか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 人力を超えた存在を知り自己の傲慢さを反省するフォマの話を取り上げることで、世間を小馬鹿にして大言壮語する自信過剰な私に、世間には「私」が決して乗り越えられない大きな壁が存在することを教えようとしたため。

イ 自己の力をわきまえず挫折し限界を知ったフォマの話を取り上げることで、世の中の様々な障害の存在にも気づかず、さしたる努力もせずに自分の思いのままに生きようとしている「私」の考えの危うさを示唆しようとしたため。

ウ 人力を超えた自然に果敢に挑んで挫折したフォマの話を取り上げることで、勉強も働きもせずに怠けてばかりいるうえ、そのことへの言い訳を並べ立てる「私」に、失敗を恐れず実直に努力することの必要性を説こうとしたため。

エ 人力を超えた存在を知り打ちのめされるフォマの話を取り上げることで、実人生を生きてもいないのに自分の生き方がすべて正しいと豪語し、それを他人に無理矢理押しつけようとする「私」に将来の挫折を暗示しようとしたため。

オ 自己の能力を超えた存在を知ってはじめて周りを意識するようになったフォマの話を取り上げることで、友達の意見を無視し自己主張ばかりしている「私」に、他者の気持ちを忖度することの大切さを伝えようとしたため。

問四 傍線部2「私たちは等しくはなかったが、結果的に一心団体といってもいいほど接近しあっていた」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 対照的な志向を持つため絶えず対立してきた自分たちが、自分にはないものを相手から学ぼうとするうちに、その考え方までもが似てきたということ。

イ 人間に必要な要素が各々欠けていた自分たちが、その欠損部の重要性に気づき、両者がともにそれを求めあうようになってきたということ。

ウ 相反する志向を持つて生きてきた自分たちが、相手にあつて自分にはないものを互いに求め合ううちに、強く結びつくようになってきたということ。

エ 異なった志向に心惹かれてきた自分たちが、相手が持つ志向に魅力を感じ、互いに相手のことを知ろうとするようになってきたということ。

オ 相容れない志向を持つている自分たちが、相手と同じ志向を持つことを目指していくうちに、両者の間の区別が曖昧になってきたということ。

問五 傍線部3について、次の二つの設問に答えよ。

(1) 「大滝」にとって「笑い」とはどのようなものか。百字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

(2) 「笑うことを身につけて」いながら「すべてを笑いのめすことができず」にいる「大滝」のありようを比喩的に表現した部分を、本文中より三十六字以上四十字以内（句読点等を含む）で抜き出して、その最初と最後の三字を記せ。



問六 本文の内容や表現の説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 「私」はふとしたことから自分と異なる生き方をしていた級友と親しくなるが、ともに学校から処罰されたことをきっかけに心が離れ、やがて別々の道を歩むことになるという思い出が、情感豊かに描かれている。

イ 知識や知恵を持つ文学好きの級友が、野卑なところのある「私」の影響を受け、次第に怠惰に生きるようになり人生への意欲を失っていくさまが、戦争という暗い時代を背景にしながら、印象づけられている。

ウ 同じ学校に通っていた「私」と友人が、互いに異質な存在であるがゆえに惹かれあうものの、結局は理解し合うに至らなかったという苦い経験を、それぞれの立場から丁寧な筆致で活写している。

エ 幼い頃は文学的なものにあまり興味を抱かなかった「私」が、はじめて得た文学的友人との一種独特な交流について、それぞれの人物像を浮き彫りにしながら、やや距離をおいて回想している。

オ 戦争中という極限状況の中で、節度のない生活を送っていた「私」が、級友の影響によって小説を愛好するようになる一方、級友は小説への情熱を失っていくという皮肉な結末が、冷徹な目を通して描出されている。

国語の問題は次の頁へ続く。

【三】 次の文章は『狭衣物語』の一節である。狭衣大將は、ふとしたことがきっかけで飛鳥井女君と結ばれたが、その後、女君は

亡くなってしまった。大將は、その一周忌の法要を女君の叔母(尼君)のもとで盛大に営んだ。これを読んで、後の問に答えよ。

(配点 五十点)

こと果てて、僧どもなども皆まかでぬれど、みづからはとまりたまひて、<sup>(注1)</sup> 尼君に会ひたまひて、姫君の御有様など語りたまひて、<sup>(注1)</sup> 尽きせずあはれと思したり。入相の鐘の音ほのかに聞こえたる夕暮の空の気色も、所のさま言ひ知らず心細げなるを、簾巻き上げてつくづくとながめたまひつつ、行ひすましたまへるけはひ、いみじうあはれなり。

<sup>あかつき</sup> 暁 近くなりぬらむとおぼゆるまで居明したまひて、あまり苦しければ、<sup>1</sup> やがて端つかたにうちまどろみたまへるに、ただありしながらのさまにて、かたはらに居てかく言ふ。

<sup>(注2)</sup> 暗きより暗きに迷ふ死出の山とふにぞかかる光をも見る

と言ふさまのらうたげさもめづらしうて、「もの言はむ<sup>c</sup>」と思ふほどに、ふと覚めて見上げたれば、<sup>d</sup> はるばると見えわたされて、月のみぞほのかにうつりける。

雲のはたてまで残りなくさやかに澄みわたりたる空の気色、ただの寢覚めだにも心細かりぬべきほどなるを、<sup>3</sup> ありつる面影はただうつにおぼえたまひて見まはされたまふを、人々は皆遠く退きつつ、いとよく寝たり。

ひとりつくづくと空をながめたまひつつ、泣く泣く越ゆらむ死出の山路<sup>やまぢ</sup>まで思しやらるるに、かの、「吉野の山も」と、うらめしげなりしさまなどの、何となくなつかしうをかしかりしも、<sup>e</sup> ただその折の心地したまひて、

<sup>4</sup> おくれじと契りしものを死出の山三瀬川<sup>みつせがは</sup>にや待ちわたるらむ

と思しやるにも、<sup>5</sup> 枕は浮きぬべければ、起きたまひて経をぞ読みたまふ。「<sup>(注5)</sup> 皆如金色徒阿鼻獄」といふわたりを心細げに読み流したまへる、言ひ知らずかなしきに、寝たりける人も、<sup>6</sup> おどろきけるにや、<sup>(注6)</sup> ここかしこに鼻うちかむ者あり。仏だに現はれたま

へりし御声なれば、人はまして忍びがたかりけり。

(注)

- 1 姫君……狭衣大将と飛鳥井女君の子。
- 2 暗きより暗きに……『法華經』中の一句をふまえた語句。「暗き」とは「煩惱の闇」の意味。
- 3 「吉野の山も」と、うらめしげなりしま……初めて狭衣大将と飛鳥井女君が出逢った際、大将が女君を残してたち去ろうとしたときの女君の様子。「吉野の山」とは、大将がそのとき引用した古歌の一部。
- 4 三瀬川……冥途にある、死者の渡らねばならない川。「三途の川」とも言う。
- 5 「皆如金色從阿鼻獄」……『法華經』中の一句。
- 6 仏だに現はれたまへりし……かつて狭衣大将が粉河寺に詣で、読経していたときに普賢菩薩が姿を現した。

問一 二重傍線部の助動詞aくeの意味用法として最も適当なものを、次のア～ケの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ(同じ記号を何度用いてもよい)。

ア 受身    イ 自発    ウ 当然    エ 完了    オ 過去    カ 推量    キ 意志    ク 打消    ケ 断定

問二 傍線部1「やがて」・6「おどろきけるにや」を、それぞれ現代語訳せよ。

問三 傍線部2「とふ」の意味として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 供養する    イ 看病する    ウ 訪問する    エ 開放する    オ 放浪する

問四 傍線部3「ありつる面影はただうつつにおぼえたまひて見まはされたまふ」とはどのようなことか。人物関係をあきらかにして説明せよ。

問五 傍線部4「おくれじと契りしものを」はどうか。最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 愛情では誰にも劣らないと契りを結んだのに、ということ。

イ 死後の法要を営むと誓ったのだから、ということ。

ウ たがいに生死をともにしようと誓ったのに、ということ。

エ 忘れないでほしいと契りを結んだのだから、ということ。

オ 他の女に心がわりはしないと誓ったのに、ということ。

問六 傍線部5「枕は浮きぬべければ」とあるが、狭衣大将のどのような様子を表しているか。十五字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

問七 『狭衣物語』は、『源氏物語』のあとに成立し、その影響を受けた作品と言われているが、同じように、『源氏物語』以後に書かれて『狭衣物語』とほぼ同じ時期に成立した作品を、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 竹取物語    イ 十六夜日記    ウ 伊勢物語    エ 更級日記    オ 雨月物語

国語の問題は次の頁へ続く。

④ 次の文章を読んで、後の問に答えよ。(設問の都合で、返り点・送り仮名を省いたところがある。)(配点 四十点)

王廼士者、不知何許人。文献王時居江陵、以善卜名。周晋王

柴榮之未貴也、以布衣与大商頡跖氏貨殖荊南。一日、過廼士

卜。方布卦、忽一著躍出、卓然而立。廼士大驚曰、「吾家筮法十

余世矣。每受高曾遺言。凡卜筮自躍而出者、其人貴不可言。

況復卓立不傾、得非為天下主乎。」遽起再拜。榮雖陽為詰

責、而私心甚喜。後果承郭氏之後、踐皇帝位。一如廼士言。

〔十国春秋〕による

(注) ○王廼士……王は姓。「廼士」は知識人の意味。

○文献王……五代十国時代の荆南国の第二代国王。

○江陵……荆南国の地名。

○卜……占い。「卜筮」も同じ。

○周晋王柴榮……「周」は五代十国時代の後周。「晋王」は称号。「柴榮」は人名。

○大商頡跖氏……「頡跖」という姓の大商人。

○貨殖……商売をする。



- 布<sub>レ</sub>卦……占いの準備をする。
- 蓍……めどぎ。占いに用いる細い竹の棒。
- 卓然而立……まっすぐに立つ。
- 吾家筮法十余世……我が家の占いは十数代続いてきた。
- 高曾……祖先。
- 再拜……丁寧にお辞儀をする。
- 詰責……責めとがめる。
- 郭氏……後周の初代皇帝郭<sub>かく</sub>威<sub>い</sub>。
- 踐……位に就<sub>つ</sub>く。

問一 傍線部⑦「凡」、⑧「雖」の読みを、送り仮名も含めてすべて平仮名で記せ。

問二 傍線部⑨「布衣」、⑩「一日」の意味の組合せとして最も適当なものを、次のア～カの中から一つ選び、記号で答えよ。

- |   |      |        |
|---|------|--------|
| ア | ⑨ 役人 | ⑩ 一日中  |
| イ | ⑨ 庶民 | ⑩ ついたち |
| ウ | ⑨ 僧侶 | ⑩ ある日  |
| エ | ⑨ 役人 | ⑩ ついたち |
| オ | ⑨ 庶民 | ⑩ ある日  |
| カ | ⑨ 僧侶 | ⑩ 一日中  |

問三 傍線部⑪「不知何許人」は「何<sub>いづ</sub>許<sub>こ</sub>の人なるかを知らず」と読む。この読みに従って、解答欄の原文に返り点を施せ。（送り仮名は不要。）

問四 傍線部②「遽起再拝」とあるが、(I)誰が、(II)誰に向かってお辞儀をしたのか。それぞれ本文中から抜き出して答えよ。

問五 傍線部③「私心甚喜」とあるが、柴柴はなぜ喜んだのか。五十字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

問六 傍線部④「一如<sub>ニ</sub>処士言」を(I)書き下し文に改め、(II)現代語訳せよ。

















